

『文阿弥花伝書』諸本の書誌学的整理及び諸本間の関係の考察

山下 亜加音

はじめに

『文阿弥花伝書』と従来称されてきた伝書群は、初代文阿弥（後述）が著述・相伝に深く関わったか又は文阿弥に仮託されたと考えられる花伝書（花の伝書）であり、いけばなが「たて花」と呼ばれる最初の様式を持ち始めた室町時代後期の花のあり様を伝えている。しかし、これらの伝書の基礎研究は、岡田幸三氏・伊藤敏子氏・矢野環氏等によつて考察が行われてきたが、複数の伝書を『文阿弥花伝書』と称し一伝書かのように扱っていることをはじめ、学術的検討が十分ではない。基礎研究の不足は、他の室町時代の花伝書にも共通する課題であり、草創期のいけばなについての学術研究が十分に進んでいない一因とも言える。本稿では、『文阿弥花伝書』群について、改めて書誌学的整理をはじめ資料研究としての考察を行い、今後中世の花伝書の学術研究を深めていくための基礎を整える一助とする。特に、これまで考察が少なかった東京大学所蔵及び九州国立博物館所蔵の花伝書に収められるそれらの一類にも注目する。

第一章 文阿弥及び諸本の概要

第一節 文阿弥について

文阿弥の事績については、山根有三氏が相国寺の禅僧、景徐周麟による「綯谷庵文阿弥肖像賛」、『翰林胡蘆集』¹⁾等の資料に基づいてまとめられており、それに基づいて要点を示す。文阿弥には初代と二代目がいたと考えられる。初代の文阿弥は、鷲尾隆康の日記『二水記』の永正十四年（一五一七）十一月十一日条の記述から当該年に没したことが知られ、また「綯谷庵文阿弥肖像賛」には文阿弥の弟子の宣阿弥が師の七十一歳の寿像を画家に描かせたとあることから、文安四年（一四四七）までに生まれ、永正十四年（一五一七）に没したことが分かる。「綯谷庵文阿弥肖像賛」から、初代の文阿弥は金蓮寺（四条道場）に所

属した時衆でたて花の名手であったこと、景徐周麟から綯谷庵という庵号を与えられたことが知られ、公家や禅僧の日記に度々登場する。例えば『山科家礼記』では長享三年（一四八九）六月二十四日、斯波邸の武衛花会に「モンアミ出テ立候也」とあり、大沢久守らとともに花を立てていることが確認されるほか、『鹿苑日録』により永正四年（一五〇七）五月六日、相国寺鹿苑院での足利義満百回忌の法会の際、十一代將軍足利義高が御成の客殿に花を立てたこと（『鹿苑日録二十三 東雲首座始遷蔭涼軒所記』²⁾）が分かる。また永正九年（一五二二）四月には、同月に十代將軍足利義植（二期目）が細川高国邸に御成の時の座敷飾りの次第を記した『細川殿御銘』³⁾が、相阿弥から初代文阿弥に相伝されている。続いて二代目文阿弥が、永正十七年（一五二〇）十月頃から活躍し、特に大永（天文）年間に池坊専応と並称されて活躍したことが『二水記』『言継卿記』『多胡辰敬家訓』などから知られる。

第二節 『文阿弥花伝書 甲』

『文阿弥花伝書』群には、異なる四種類の伝書が現存する。本稿では、そのうち二種類を、それぞれ『文阿弥花伝書 甲』、『文阿弥花伝書 乙』と仮称して取り上げる。残りを『文阿弥花伝書 丙』、『文阿弥花伝書 丁』と仮称し、丙は本節（一）④⑤及び第二章第四節に、丁は本節（一）③及び第二章第二節に言及する。

以下に、まず『文阿弥花伝書 甲』の伝本及びその一部を有する別伝書のそれぞれの概要を示す。ただし奥書については第二章に述べる。

（一）『文阿弥花伝書 甲』の伝本

本伝書の現存伝本には他の花伝書と合写された合写伝書（合抄）の形で存在するものもある。それらも含め本伝書の内容を伝える伝本は以下のとおりである。

①石田六鳳氏旧蔵『花秘伝』一卷（石田家本）

原本筆者未見。伊藤敏子氏によれば紙本墨書着色、三四・〇×六〇五・八センチメートル、外題なし、内題「花秘伝」、石田六鳳氏の旧蔵本である。現所在不明。石田六鳳氏は花道の古典籍を昭華社花道文庫として収集し、自身も昭

美流としていけばなの指導も行っていた。『続花道古書集成 第四卷』に名和修氏による当該本の翻刻がある他、『いけばな美術全集第二巻 いけばなの成立』に全体の写真と翻刻(図版解説を付している伊藤敏子氏によるものか)が掲載されている。伊藤敏子氏は当該本について、「紙質と寸法・書風・絵図の彩色などからみて、江戸初期頃の書写とみられる。」と述べており、この見解にしたがっておく。

②陽明文庫蔵『立花故実』一冊(陽明文庫本)

原本筆者未見。名和修氏によれば、紙本墨書で絵図はなく、二〇・六×一三・六センチメートル、表紙は薄墨の打曇りを施した鳥ノ子紙で、装幀は大和綴、本紙は美濃様の楮紙、墨付二十三丁、外題「立花故実」、内題なし。近衛家伝来として現在も京都市右京区の陽明文庫に所蔵されている。『図説いけばな大系第六巻 いけばなの伝書』に当該本の表紙・奥書の写真と名和修氏による全体の翻刻が掲載されている。当該伝書の書写に関して、名和修氏は、「この本の書写はその筆跡から鑑みるに、近衛家第廿一代家熙(一六六七―一七三六)の自筆によるものであることは明白である。」とし、近衛家熙が、極楽坊宥純の書写した底本を、花押も含めて忠実に書写したもので、本文・絵図の欠落箇所も底本において既に欠落していたと考えられる、と指摘している。近衛家熙による書写であるとの名和氏の見解は、『近衛家熙―風雅の探求 三の丸尚蔵館展覧会図録No.25』に掲載の近衛家熙筆跡の画像と比較して首肯されるものであり、このことから当該伝書は江戸時代前中期の書写と考えられる。

③西教寺蔵『花伝抄』七巻のうち第六巻『大巻物十二』(西教寺本)

原本筆者未見。滋賀県大津市の西教寺(天台真盛宗総本山戒光山兼法勝西教寺)蔵『花伝抄』は、林智子氏によれば紙本墨書の七巻八軸とされるが、どの巻が二軸になっているかは示していない(後述する写真・翻刻によっても判別できない)。森谷尅久氏によれば縦一六センチメートルで長さは巻によつてまちまちであり、また、収められた桐箱には「花伝抄十二巻全部西教寺常住物 役者周徳記之」とあることから全十二巻からなる巻物であったらしい。一方、伊藤敏子氏は「もとは十巻あったようである」としているが理由は示していない。『大和文華 第四十八号いけばな特輯』には『花伝抄』全体を指して『文阿弥花伝書』として紹介され、伊藤敏子氏による翻刻がある他、『図説いけばな

大系第六巻 いけばなの伝書』には七巻に共通する伝授者である賢珠斎月浦の名をとつて『賢珠花伝抄(文阿弥花伝書)』として紹介され、第六巻「大巻物十二」の絵図の写真と森谷尅久氏による同巻以外の六巻の翻刻が掲載されている。また、京都府京都文化博物館・東京都江戸東京博物館・読売新聞社編『特別展いけばな 歴史を彩る日本の美』に『賢珠花伝抄(文阿弥花伝書)』として西教寺蔵『花伝抄』の一部写真が掲載されている。これらはいずれも、文阿弥とは関係のない伝書も含む合写伝書であるにもかかわらず全体をまとめて『文阿弥花伝書』と称されているところに問題がある。書写時期について、森谷尅久氏は奥書に従い「現存の七巻は弘治四年二月三日から、同年―永禄と改元―七月十九日までの、およそ半年間に書き記されたものである」としている。奥書の年記が古い順に、それぞれ、第一巻は外題「戯論第二」・内題「戯論随縁集」、第二巻は外題なし・内題「大事に可心得口伝の事」、第三巻は外題「全用抄六」・内題「抜書の事」、第四巻は外題「御座敷厳書第七」・内題「御座敷の

厳の次第の事」、第五巻は「出陳 第十」・内題「出陣の花の事」、第六巻は外題「大巻物十二」・内題なし、第七巻は外題なし・内題なし。七巻中二巻(第四巻・第六巻)の奥書に文阿弥の名が記されており、このうち第六巻「大巻物十二」の内容を本稿では『文阿弥花伝書 甲』の「西教寺本」と呼ぶ。もう一巻の第四巻「御座敷厳書第七」は座敷飾に関する心得二十五箇条である『文阿弥花伝書 丁』と仮称するが本稿では取り上げない。

④鹿王院蔵『たて花伝書』(仮称。三巻)のうち第一巻(鹿王院本)

原本筆者未見。京都市右京区の臨濟宗寺院鹿王院(覚雄山大福田宝幢禪寺鹿王院)蔵『たて花伝書』(仮称。三巻)は、林智子氏によれば紙本墨書着色、第一巻は二九・六×一〇五四・六センチメートル、第二巻は二五・八×四八〇・一センチメートル、第三巻は一七・三×一九五・九センチメートル。『大和文華 第四十八号いけばな特輯』に全体を指して『文阿弥花伝書』として紹介され、伊藤敏子氏による翻刻がある他、西堀一三等編『花道全集第二巻(花道史上)』にも『文阿弥花伝書』として紹介され、第二巻・第三巻の翻刻(解説を付した山根有三氏によるものか)が掲載されている。また京都府京都文化博物館・東京都江戸東京博物館・読売新聞社編『特別展いけばな 歴史を彩る日本

の美』²²に『文阿弥花伝書』として当該伝書の一部写真が掲載されている。これらは、この三巻がそれぞれ異なる伝書であるにもかかわらず、それを明確に区別していない点に問題がある。三巻ともに、外題・内題なし。三巻とも奥書に文阿弥の名が記されている。第一巻の内容を本稿では『文阿弥花伝書 甲』の「鹿王院本」と呼ぶ。また第二巻の内容を『文阿弥花伝書 乙』と仮称し、第三巻で後述する。第三巻は西教寺蔵『花伝抄』の第七巻及び後述する猪熊信男氏旧蔵『たて花伝書』（仮称）の第二巻と同伝書と考えられる『文阿弥花伝書 丙』と仮称するが本稿では取り上げない。書写年代について、林智子氏は室町時代としている²³が、山根有三氏は江戸初期写としている²⁴。伊藤敏子氏も江戸初期写としつつ、「鹿王院本は口伝書には珍しい大型の卷子で、本文の筆蹟が奈良絵本の書き馴れた書風であること、絵図も入念に彩色されていることなどから、数寄者が特別に写させたものかと推測される」としている²⁵。

⑤猪熊信男氏旧蔵『たて花伝書』（仮称。二巻）のうち第一巻（猪熊家本）

原本筆者未見。紙本墨書着色、大きさは未計測である。現所在不明。重森三玲氏によれば猪熊信男氏（一八八二—一九六三）の旧蔵本である²⁶。須原祥二氏によれば、猪熊信男氏は、大正・昭和期に古文獻の蒐集と研究で活躍し、宮内省図書寮御用掛、京都市史編纂委員会、叡山文庫・西陣織物館顧問、大京都振興委員会などの公職を務めつつ、古文書・古典籍類の研究や収集を行った。その蔵書は、恩頼堂文庫と呼ばれ、猪熊氏晩年前後、売却され、一部は四天王寺国際仏教大学、広島大学が購入している²⁷が、この『たて花伝書』については『四天王寺国際仏教大学所蔵恩頼堂文庫分類目録』²⁸及び広島大学の蔵書のいずれにも含まれておらず、現在も猪熊家にて所蔵されているか他所へ売却された可能性が考えられる。西堀一三等編『花道全集第二巻（花道史 上）』²⁹に第一巻の翻刻（解説を付した重森三玲氏によるものか）がある他、池坊短期大学の図書館に一九六〇年八月に撮影したと見られる全体の写真が所蔵されている（ただし座敷飾りの絵図の部分のみ失われている）。当該写真によれば、二巻とも奥書に文阿弥の名が記されている。重森三玲氏は、「書写の年代は江戸末期と考へられる」としている³⁰。第一巻の内容を本稿では『文阿弥花伝書 甲』の「猪熊家本」と呼ぶ。第二巻は西教寺蔵『花伝抄』の第七巻及び鹿王院蔵『たて花伝書』（仮称）の第三巻と同伝書と考えられる『文阿弥花伝書 丙』猪熊

家本）。

⑥九州国立博物館蔵『たて花伝書』（仮称。一巻（九博本））

原本筆者未見。九州国立博物館ホームページ「収藏品ギャラリー」によれば、紙本墨書着色、前半部分が欠落した断簡であり、二八・四×五七五・〇センチメートル³¹。九州国立博物館に所蔵されており、九州国立博物館ホームページ「収藏品ギャラリー」及び「文化遺産オンライン」³²に全体の写真が掲載されている。書写時期については先行説がない。

『文阿弥花伝書』群を四種類に分けたうち、甲の伝本は以上のとおりである。ただし、『文阿弥花伝書 甲』の一部と類似の内容を持つ別の伝書が知られている。

（二）『文阿弥花伝書 甲』の一部を有する別伝書

（二）で取り上げた伝書の他に、奥書に文阿弥の名が記載されているわけではないが、『文阿弥花伝書 甲』の一部と類似の内容を持ちつつ別の伝書の形となっているものが知られている。以下にそれらを取り上げる。

①慈照寺蔵『花伝』一巻

原本筆者未見。冒頭に「花伝」とあり、その下に「相阿弥作」とある。また心得の箇条書きの末尾に相阿弥の花押がある。翻刻が『茶道古典全集 第二巻』に掲載されている³³。筆写年未詳。

『文阿弥花伝書 甲』石田家本と比較すると、本伝書は序文がなく（石田家本序文末尾の二文に相当する内容が『花伝』の第一条となっている）、冒頭には「米元暉作。名ハ米友仁、字元暉、宋朝之人、山水ヲ多かく。」と、このたて花の心得の始祖を中国宋代の著名な画人である米友仁（字は元暉）に仮託する記述がある。これは『文阿弥花伝書 甲』石田家本の第四十二条「花を立口伝お

ほし。米元暉（³⁴）語といふ。」に相当する内容であり、両本で異なる位置にある。

また石田家本の第七条及び第二十八条から第四十一条まで、第四十三条から第四十七条までの本文がなく、石田家本に見られる座敷飾り及びたて花の絵図もない。一方石田家本と異なり、末尾に「一 絵の筆の名少々」として中国の画

家名と画題が付記されている。

②『仙伝抄』一冊のうち「奥輝之別紙」

原本筆者未見。岡田幸三氏によれば『仙伝抄』は、室町時代の花伝書三種（『仙伝抄』、『谷川流』、『奥輝之別紙』）を集成した花書である。最古の現存本は慶長年間刊行と推定される古活字本であり、それ以外に寛永二十年刊の整版本が伝存する。収録された三種の伝書のうち、「仙伝抄」と「谷川流」は文阿弥とは無関係であるが、「奥輝之別紙」（「奥輝」は誤字か）は『文阿弥花伝書 甲』の系統の伝書であると考えられる[※]。図説いけばな大系第六巻 いけばなの伝書[※]に加賀文庫所蔵本（上記古活字本）の表紙・絵図・奥書の写真と岡田幸三氏による翻刻が掲載されている他、『いけばな美術全集第二巻 いけばなの成立』[※]に同じく古活字本の東京都立中央図書館所蔵本の全体の写真と翻刻（図版解説を付している岡田幸三氏によるものか）が掲載されている。また『花道古書集成 第一巻』[※]は寛永二十年本の翻刻（翻刻者不明）と絵図の写真を掲載している。『仙伝抄』末尾には、この三種の伝書全体に係るとみられる「相伝次第」があり、そこにはこの『仙伝抄』は「三条殿」（未詳）の秘本であり、義政公の所望によって文安二年（一四四五）に富阿弥が相伝し、その後七名の相伝を経て天文五年（一五三六）に池坊専応が相伝したとされている。この奥書を根拠として、現存する最も古い花伝書と見る向きもあるが、文安二年をもって『仙伝抄』全体の成立年と判断するのは困難であり、「三条殿」や「義政公」云々という記述も仮託であるという見解が今日の通説である[※]。ただし義政の名は、①慈照寺蔵『花伝』や③『義政公御成式目』にも関係する。

「奥輝之別紙」の内容を『文阿弥花伝書 甲』石田家本と比較すると、序文及び石田家本第二十八条から第四十三条までの内容がなく、最終条の後に石田家本にない二箇条が追加されている。石田家本に見られる座敷飾り及びたて花の絵図はない。また「奥輝之別紙」という題について、岡田幸三氏は、石田家本や①慈照寺蔵『花伝』にも見られる、たて花の心得の始祖を米友仁（字は元暉）に仮託する一文が、誤読又は誤写されたことにより「奥輝之別紙」という意味の通らない書名が生じたのだろうとしている[※]。

③『都林泉名所図会』巻二のうち『義政公御成式目』

原本筆者未見。寛政十一年（一七九九）刊『都林泉名所図会』巻二の一部と

して収められ、当該伝書部分冒頭に「義政公御成式目巻巻」とあり、その下に「相阿弥筆」とある。また奥に「相阿弥」と署名がある。翻刻（翻刻者不明）が『花道古書集成 第一巻』[※]に掲載されている。また国際日本文化研究センターホームページ「都林泉名所図会データベース」に全体の写真・翻刻が掲載されている[※]。

『文阿弥花伝書 甲』石田家本と比較すると、序文がなく、①と同様に冒頭に「米元暉作。名は米友仁、字は元暉。宋朝之人。山水を画く。」との記述がある。また石田家本第二十八条から第四十一条まで、第四十三条から第四十七条までの内容がなく、末尾には「此奥、中華畫家姓名有百餘人、略之」との記述があり、中国の画人録が付されていたような体裁を採る。同本に見られる座敷飾り及びたて花の絵図もない。

④柿葉文庫蔵『立花並座敷飾』一冊のうち『莊嚴座敷次第附立華口伝事』

原本筆者未見。柿葉文庫蔵『立花並座敷飾』の中ほどに収められ、また奥に「相承之次第／善阿 三条殿 隆隆阿 杉式部少輔」とあり、次いで専応―専栄―専好―専好と専応―周永の相伝系譜が記される。『立花並座敷飾』全体の奥書によれば元文元年（一七三六）筆写。写真と翻刻が矢野環『君台觀左右帳記の総合研究』に掲載されている[※]。

『文阿弥花伝書 甲』石田家本と比較すると、本伝書冒頭に「米元暉 作略以誌之云、莊嚴座敷次第附立華口伝事」とある。序文は石田家本序文末尾の二文に相当する文のみがあり、また石田家本第七條、第八條、第十五條、第二十八條から第四十一条まで、第四十三條、第四十四條、第六十五條、第六十六條の内容がない。各條の順番は石田家本と大きく異なり、石田家本の複數條の内容が一箇條にまとめられているものも多い。また座敷飾り及びたて花の絵図はない。なお、『立花並座敷飾』の冒頭には「画師名 上」として中国の画家の名と作品の主題が列挙され、末尾には唐物工芸品に関する心得及び座敷飾りの絵図・心得が付記されている。

(三)『文阿弥花伝書 甲』との先後関係説について

(二)で挙げた伝書は、『文阿弥花伝書 甲』との違いにおいて、いくつかの共通点が見られる。いずれも、序文に加え、石田家本第二十八条から第四十一条までの内容が無い。これらは専ら唐物工芸品に関する心得である。また、石田家本第四十二条に相当する、中国宋代の画家・米友仁に仮託する一文が、伝書冒頭に置かれているか、そこから②の伝書名に転じたと見られる。いずれも石田家本にある絵図はない。また(二)①、③、④には、前又は末尾に中国の画人録が付される体裁となっており、(二)①、②、③はいずれも足利義政と関連付けられている。これらの点から、(二)で挙げた伝書は互いに深い関連性を有すると考えられる。

(二)で挙げた伝書と『文阿弥花伝書 甲』の先後関係について、伊藤敏子氏は、これらの伝書に『文阿弥花伝書 甲』石田家本第二十八条から第四十一条までの内容がないのは「唐物工芸品に関するもので、はなとかかわりがないところから省かれたのであろう」とし、またこれらの伝書に『文阿弥花伝書 甲』と比較して文意の通らない項目が散見されるのは『文阿弥花伝書 甲』からの誤写であると捉えて、これらの伝書を『文阿弥花伝書 甲』から抜き書きし別伝書の形に整えられたものとみている。一方、岡田幸三氏は、(二)④によって(二)②や『文阿弥花伝書 甲』における難解文の意味が解明できる箇所があることから、(二)④をむしろ『文阿弥花伝書 甲』の底本ととらえ、これらの別伝書の間では(二)④①③②の順に成立したと見る。また矢野環氏は、数学的・統計的手法も用いて検討した結果、岡田氏の説をほぼ認め、(二)④及び①が『文阿弥花伝書 甲』よりも古態を留めると結論づけている。しかし『文阿弥花伝書 甲』の系統の伝書の成立・伝播の全容を明らかにするためには、さらに諸本の本文に即した緻密な検証が必要であり、それにより初めて上述の議論の結論を出すことができるのではないか。これらの伝書相互の関係や、その『文阿弥花伝書 甲』との関係の考察については、稿を改めて論じる。

第三節 『文阿弥花伝書 乙』

『文阿弥花伝書 乙』と仮称する伝書は、『文阿弥花伝書 甲』とは異なり、座敷飾りの図はなく、条文ばかりの伝書である。本伝書の内容を伝える伝本は

以下のとおりである。

①鹿王院蔵『たて花伝書』(仮称。三巻)のうち第二巻(鹿王院本)

鹿王院蔵『たて花伝書』(三巻)の詳細は第二節(二)④に前述のとおり。このうち第二巻は花の立て方の口伝六十六箇条及び奥書から成る。

②東京大学蔵『立花伝書』一冊(五伝書)のうち第二伝書(東大本)

今回、重田みちと筆者が『文阿弥花伝書 乙』の一伝本であることを見出した。筆者の調査によると、『立花伝書』は紙本墨書、一二・五×一七・五センチメートル、四〇丁。大正八年(一九一九)四月二十五日に藤井咲子氏が東京大学に寄贈したもので、東京大学総合図書館に『立花伝書』という伝書名で所蔵されている(蔵書票による)。五種類の花の伝書が一冊に合写されている。奥書に文阿弥の名がある伝書は前から二番目、十丁目表から十七丁目裏までであり、内題が綴じ込んでいるため伝書名は不明である。書写時期は奥書にある寛文六年(一六六六)またはそこから遠くない江戸時代前期であると見る。

なお、『文阿弥花伝書 乙』の位置づけについては第三章で論じ、東大本本文の紹介を、別稿に予定している。

第二章 『文阿弥花伝書 甲』諸本の構成と伝授―奥書に注目して―

本章では、『文阿弥花伝書 甲』の諸伝本の構成と伝授について、奥書に注目しつつ論じる。

第一節 石田家本

石田家本の構成は、序文と七十四箇条の一つ書きの心得、奥書と着色の絵図三箇所から成る。前半四十一箇条は、三具足の花、座敷の荘厳と花、唐物工芸などについての心得、後半は、たて花の口伝の始祖を米友仁に仮託する「一、花を立口伝おほし。米元輝語といふ。」の一箇条以下、花の立て方の口伝三十二箇条がある。序文と奥書を備えており、条数について他本と比べると『文阿弥花伝書 甲』の完本としての体裁は整えられていると言って良い。奥書は左

のとおりである。翻刻は『いけばな美術全集第二巻 いけばなの成立』掲載の

翻刻を同書掲載の写真と照合して確認し修正した。句読点・濁点・読みは筆者による（以下同じ）。

右此一巻、依花用文阿に令相伝者也。（花用に依りて）（相伝せしむる）

文明八年十二月廿八日 宗梅 在判

右此一巻、雖為斟酌、依御所望、木沢左京口殿に令相伝者也。（斟酌を為すと雖も）（御所望に依りて）（相伝せしむる）

天文九年五月十七日 綉谷庵 在印判

文阿 在判
有印判

右此一巻者、天文十一壬寅沽洗中旬之一礼不（たまたまならず）適到来候間、令書写之（之を書写せしむる）

者也。秘藏至極之写本、努而（努めて）（他見に及ばず）不及他見。或（或いは）貴命又者（又は）

其甚深之雖為朋友、猶以可禁。（その甚深の朋友たりと雖も）（猶以て禁すべし）則（則ち）況（いわんげ）（疎遠の輩において）於疎遠之輩乎。一向々々（一向一向）

可斷其望者也。（その望みを断つべし）

于時天文十二年癸卯三月日

右筆如閑 花押・印

天文九年に相伝を受けた「木沢左京口」は木沢左京亮であろう。文明八年（一四七六）に宗梅から文阿弥、天文九年（一五四〇）に綉谷庵文阿弥から木沢左京亮に相伝し、天文十二年（一五四三）に右筆如閑斎が写したとある。このことと先の文阿弥の事績に照らして考えると、文明八年（一四七六）に宗梅から教えを伝授された文阿弥は初代の文阿弥であり、天文九年（一五四〇）に木沢左京亮に教えを伝授した綉谷庵文阿弥は二代目の文阿弥とすると時期的に矛盾はない。木沢左京亮は、細川晴元の家臣の武将であった木沢長政（生年不詳—天文十一年（一五四二））と考えられる。宗梅については次章に考察する。

陽明文庫本、西教寺本、鹿王院本、猪熊家本は、序文が石田家本とは若干異

なる一方、この四種の本の間では互いの文言が極めて近似しており、この四種の本が同系統であると考えられる。ただしこれらの本の奥書はそれぞれ異なっている（後述）。

第二節 西教寺本

西教寺本は、石田家本の第五条、第十二条前半二文がない（伊藤敏子氏は、紙継が剥がれて二紙分ほど失われていると指摘している）ことに加え、最終条の後ろに九莊嚴・七莊嚴の絵図、二十五の「徳」が追記されている。この九莊嚴及び七莊嚴の絵図及び二十五の「徳」については、西教寺本以外の本には見られないことから、『文阿弥花伝書 甲』には元来なかったがいずれかの段階で加えられたのではないかと考えられる（伊藤敏子氏は横山賢宗が賢珠斎（後述）が追加したのだろうとする）。奥書は以下のとおりである。伊藤敏子氏による翻刻を元に形式を整え、標点と読みを示した。

右此巻物、從宗梅・文阿弥・聖阿弥・横山賢宗相伝之趣、不（一字も残さず）一字殘（伝えしむる）令伝処也。

永禄元年七月十五日 賢珠
盛歩御坊参 月浦 花押

宗梅—文阿弥—聖阿弥—横山賢宗と相伝されてきたものを、永禄元年（一五五八）七月十五日に賢珠斎月浦から盛歩坊へ相伝したとある。この宗梅—文阿弥の「文阿弥」は、石田家本と同様に初代の文阿弥とすれば時期的に矛盾はない。それ以降の相伝の系譜は石田家本と異なっている。聖阿弥、横山賢宗、賢珠斎月浦、盛歩坊の人物については詳らかではない。石田家本と西教寺本の構成と奥書を重ね合わせて考えると、宗梅から初代の文阿弥に対して伝授された伝書が、すでに序文及び七十四箇条の体裁を持ち合わせていた可能性が高い。

なお、西教寺蔵『花伝抄』のうち、『文阿弥花伝書 丁』（第一章第二節③参

照)に当たる第四卷「御座敷蔵書第七」は、奥書によれば、文阿弥―聖阿弥―霜阿弥―横山賢宗と相伝し、天文五年九月二十七日に横山賢宗から賢珠斎月浦へ相伝、永禄元年六月二十八日に賢珠斎月浦から盛歩坊に相伝されたとある。「文阿弥―聖阿弥」の相伝は『文阿弥花伝書 甲』西教寺本と共通していることから、この「文阿弥」も初代の文阿弥と考えられる。

西教寺蔵『花伝抄』の他の五卷(第一巻く第三卷、第五卷、第七卷)は、いずれも賢珠斎月浦から盛歩坊へ相伝されたものであるが、内容はいずれも上述の二卷の内容と大きく異なっている。また、これら七卷の相伝は弘治四年・永禄元年(いずれも一五五八年)中に徐々に行われている。したがって西教寺蔵『花伝抄』の七卷は、賢珠斎月浦から盛歩坊へ教えを段階的に伝授した後、一式の花伝書としてまとめられたものと考えられる。

第三節 陽明文庫本

陽明文庫本は、序文と、石田家本同様の七十四箇条の口伝、奥書からなるが、序文にかなりの行数の欠落があり(「此間教行落脱」と朱書)、絵図も欠落している(本文で「此絵云々」と記された所は「図缺」と朱書、他の場合は「此間落脱」と朱書してある)。奥書は左のとおりである。名和修氏による翻刻を同本の写真と照合して確認した²⁰⁾。

(器用に依り)

右此巻、依器用、極楽房有純(綉谷庵正本を以て)以綉谷庵正本写相伝者也。天徳庵

永禄五壬戌年臘月四日 慶俊判

(ならびに序之れ有り)

紙数十九丁并序有之。条目七十四ヶ条。

三井筒井極楽坊

有純(花押)

奥書によれば、永禄五年(一五六二)臘月(臘月Ⅱ陰曆十二月の誤りか)四日に天徳庵慶俊が綉谷庵文阿弥の筆になる正本を筆写し、これを極楽坊有純が相伝し、書写したものとされる。「三井筒井極楽坊有純」の署名と花押があるが、

天徳庵慶俊、極楽坊有純については未調査である。「綉谷庵正本」がどこまで史実を反映しているかは現時点では未詳である。

第四節 鹿王院本

鹿王院本は、石田家本の第五十一条に該当する条だけがない。以下の奥書がある(伊藤敏子氏による翻刻²¹⁾に拠った)。

天承元年五月十三日 綉谷庵文阿弥 花押

被伝授者の名前はない。「天承元年」(平安時代の一一三一年)との記年は、鹿王院蔵『たて花伝書』第三卷(『文阿弥花伝書 丙』)の、紀貫之が宇治に三年参籠して天承元年五月十三日卯の刻、夢にこの巻を賜ったという序文から来ていると考えられるが、この記年が信憑性に欠けることは言うまでもない。

第五節 猪熊家本

猪熊家本は、石田家本の第十七条、第二十五条、第二十八く四十二条、第五十く五十五条、第五十七条、第五十八条、第六十三条、第六十五く六十七条、第六十九条、第七十条に該当する条々がなく、また他の条にも部分的な欠落や明らかな誤字が散見される。以下の奥書がある。池坊短期大学図書館所蔵の写真に拠り翻刻する。

(立花稽古御懇望去り難しと雖も)

(今存じ候の間)

右此饒之一巻、雖立花稽古御懇望難去、今存候之間、雲門寺省三藏主相伝

(すなわち)

(承見有るべからざる)

畢。輒 人不可有外見者也。穴賢可秘々々。

(あなかしこ秘すべし秘すべし)

綉谷庵文阿弥陀仏 在判

桂莊軒周歛藏主 在判

雲門軒省三藏主 花押

桜井四郎右衛門尉殿／まいる

綉谷庵文阿弥―桂莊軒周歛藏主―雲門軒省三藏主―櫻井四郎右衛門尉と相伝されている。相伝時期不記のため、この文阿弥が初代か二代目かは現時点で未詳である。文阿弥以外の人物については未調査である。

第六節 九博本

九博本は、現存本は残簡であり、座敷飾りの絵図及び石田家本の第二十八条以下の本文が記載されている。条数は石田家本第二十八条以下と同じであるが、同本の第四十三条と第四十四条に該当する条の順が入れ替わっている。また、第四十二条以下の条々には、石田家本・陽明文庫本・西教寺本・鹿王院本・猪熊家本との異文があり、異なる心得が散見される。例えば石田家本第四十五条に相当する条について比較すると以下の通りである。翻刻は、当該本の写真⁸に拠り筆者が行った（以下同じ）。傍線は筆者による。

（石田家本）

一 花の高さハ一たけはん。但、草花瓶ハ花の本木のせ半によるべし。ふとくハひきく、ほそくハ少高も立なり。又所にも依事なり。

（九博本）

一 花の高さ一たけ半也。但、草花瓶其外すな物などハ、壺たけ半の心得はあるまじきなり。いづれのしんも、ふとくつよきをばすこしひきくたつべし。又ほそきハいさゝかたかくもたつるなり。又は所にもよるべし。

このように九博本には、他本には見られない「砂の物」という語が、草花瓶と列挙されている。山根有三氏によれば、砂の物は天文年間以降、草花瓶などから発展した様式と考えられている⁹。この他、石田家本第五十七条に相当する「当壁の枝」の心得など、他本よりも事細かな心得が書かれている条々がある。したがって、九博本のこれらの心得は石田家本等の記述よりも時代が下る可能性が高い。九博本の奥書は次のとおりである。

右此巻物、^{（御在洛を逐げ）（御稽古を究め）（思いを致し）}逐御在洛究御稽古致患／御懇望之条、^{（相伝せしめ）}文鏡法師江令相伝畢。

千金莫伝。^{（敢えて以て他見有るべからざる）}敢以不可有他見者也。

大永二年壬午八月日 綉谷庵 文阿 在判

右此一巻、^{（御花御数寄たるに依りて）}春鏡坊尊俊依為御花御数／寄御懇望候。^{（殊に器用眼前を以て）}殊以器用眼前の間、

^{（老眼たるを雖も）}雖為老眼、^{（目毫を以て）（相伝せしめ）}絵図共に以目毫令相伝畢。

^{（ゆめゆめ）（外見有るべからざる）}努々不可有外見者也。

永祿二年己未八月朔日 文鏡（花押・朱印）

春秋八九二歳
（ママ）

「八九二歳」は七十二歳などの誤りか。大永二年（一五二二）に文鏡法師に相伝したとされる文阿弥は、永正十四年（一五一七）に初代文阿弥が死去していることから、二代目だと考えられる。この奥書に見える文鏡法師、春鏡坊尊俊については未調査である。

以上を踏まえると、九博本は、他の五本よりも時代が下る記述を含んでいる。九博本の二代目文阿弥から文鏡法師への相伝が大永二年（一五二二）であり、石田家本の二代目文阿弥から木沢左京亮への相伝は天文九年（一五四〇）であり後であることから、九博本独自の文言（特に砂の物に関する記述）は、二代目文阿弥よりも後代の人による改変の結果であると考えるべきであろう。

以上のように、石田家本・陽明文庫本・西教寺本・鹿王院本・猪熊家本が同種と言える内容を持ち、中でも石田家本以外の伝本がほぼ同文であり、西教寺本の伝授の系譜に他本に含まれる二代目文阿弥が含まれていないことから、『文阿弥花伝書 甲』は、宗梅から初代の文阿弥に伝授された時にすでに序文及び

七十四箇条の体裁を有していた可能性が高いと言える。また、石田家本と比べ、他の四本には脱落があり、その箇所はまちまちであることから、体裁の面においては石田家本が最も完本の形態に近いと考えるが、細かな表現については当該四本の方が祖本の本文に近いものと考えられる。矢野環氏は、数学的・統計学的手法も用いながら検討した結果、西教寺本が最も古態を留めると判断しているが、別の観点からも検討したい。九博本は、伝授の過程でこれらの五本よりも後世の改変の影響を比較的大きく受けたと言える。

第三章 『文阿弥花伝書 乙』東大本の位置づけに関わる論点の検討

本章では、本稿で新たに紹介する『文阿弥花伝書 乙』東大本の位置づけに関わる論点として、『文阿弥花伝書 乙』諸本の構成と伝授、伝授者宗梅と『文阿弥花伝書 乙』の位置づけを検討する。

第一節 『文阿弥花伝書 乙』諸本の構成と伝授

『文阿弥花伝書 乙』の構成は、鹿王院本を元にする、たて花の心得の条々六十六箇条及び奥書から成る。鹿王院本の奥書は「天承元年五月十三日 綏谷庵文阿弥（花押）」となっており、『文阿弥花伝書 甲』鹿王院本と同様に、この年記には信憑性がない。

東大本は、鹿王院本の第一条から第二十五条までがなく、また最後に鹿王院本にはない五箇条の本文がある。また以下の奥書がある。翻刻は筆者が行った。

右此一巻、雖斟酌存候、致／文阿弥陀仏相伝者也。
（斟酌存じ候と雖も）（文阿弥陀仏に相伝致す）

文明八年二月十八日 宗梅

天文拾一年八月八日 中村又五郎 家宗

文阿弥陀仏 在判

寛文六丙午歳

霜月廿二日

文明八年に宗梅から文阿弥、天文十一年に文阿弥から中村又五郎家宗に相伝

されたとある。『文阿弥花伝書 甲』石田家本同様、宗梅から文阿弥に伝授されたと記され、相伝年記も石田家本と類似している（石田家本は文明八年十二月二十八日）ことが注目される（後述）。

東京大学蔵『立花伝書』に合写された冒頭の伝書は奥書に「寛文六年霜月二十四日」とあり、伝授者の名は記されていない。三番目の伝書は奥書に「寛文六年睦月十六日 律師日梵」とある。四番目の伝書には年記はないが、「律師日梵」と、三番目の伝書と同様伝授者の署名がある。五番目の伝書には奥書がない。これらの奥書から、東京大学蔵『立花伝書』は、様々な系統の花伝書が寛文六年（一六六六）またはそれ以後に合写されたことが知られる。

第二節 宗梅についての検討

『文阿弥花伝書 甲』石田家本及び西教寺本、並びに『文阿弥花伝書 乙』東大本の奥書には、文阿弥に花のたて方の教えを伝授した人物として、共通して「宗梅」の名が見られる。これらの花伝書群が通例『文阿弥花伝書』と呼びならわされているのは、恐らく、後代の人々に宗梅より著名な文阿弥の名をとったものと考えられ、従来の研究でも宗梅の来歴は論じられていない。しかし奥書の文に従えば、宗梅がその教えを文阿弥に伝授したものと理解すべきであり、これらの伝書の伝来においてより重要なのは宗梅であり、成立に関与している可能性もある。

たて花に関する同時代の記述の中では、「宗梅」の名は、管見では『文阿弥花伝書』群以外に見いだせない。それ以外に「宗梅」の名を持つ同時代の人物としては、連歌師の宗梅が見いだされる。木藤才蔵氏によれば、宗梅は宗祇の門弟として『宗長手記』に大永六年（一一五六）歳末の条に登場するほか、大永七年（一一五七）正月十九日の『山何百韻』、天文十三年（一一五四）十月十五日の『山何百韻』の連衆として存在が確認できる²⁰。また江戸時代前期の人名録『顕伝明名録』によれば「宗祇門人宗祇若衆右筆」とあり²¹、宗梅が書写したとされる文献も残っている。このことから、宗梅の活動時期は大永く天文年間が中心であったと考えられる。『文阿弥花伝書』群が時に和歌を引用してたて花の教えを伝えていること、この時代の文化人は一人物が諸芸に精通することも多見され、また、例えば室町時代後期の能役者・金春禪鳳による『禪鳳雑談』に

池坊と花の談義をした記述が見られるなど、たて花の専門家が他芸の専門家と親しく交流することも活発に行われていたようであることを考えると、連歌師宗梅が『文阿弥花伝書』群の教えを伝授した宗梅と同一人物である可能性がないわけではない。しかしながら、『文阿弥花伝書 甲』石田家本や『文阿弥花伝書 乙』東大本の奥書によれば、宗梅から文阿弥への相伝時期は文明八年（一四七六）である。この年記と上述の天文十三年（一五四四）の『山何百韻』との間に六十八年の開きがあることを踏まえると、この年記に従えば、この宗梅が連歌師宗梅と同一人物であることは、不可能ではないがやや無理があると言わざるを得ない。連歌師宗梅が宗祇の右筆であったことを踏まえると、室町時代末期に当該宗梅の名は広く知られていた可能性があり、『文阿弥花伝書』群の奥書が連歌師宗梅に仮託して書かれた可能性があるのではないか。

第三節 『文阿弥花伝書 乙』の位置づけ

『文阿弥花伝書 乙』は、鹿王院蔵『たて花伝書』以外の『文阿弥花伝書 甲』を含む伝書には含まれていない。このように『文阿弥花伝書 乙』『文阿弥花伝書 丙』及び『文阿弥花伝書 丁』の存在は、文阿弥が伝授に関わった伝書の範疇に入れるべき伝書はどこまでか、という問題を提起する。山根有三氏は、鹿王院蔵『たて花伝書』について検討する中で、第一巻は文阿弥の伝であろうとしつつも、「二巻・三巻は彼と関係がないと思はれる。但し後考を俟つ」とし、江戸時代初期の花道流行の際に現在の姿に作り上げられたのではないかと論じているが、根拠は明らかにしていない。これを踏まえて本稿では特に、『文阿弥花伝書 乙』の位置づけを試みる。

『文阿弥花伝書 乙』の心得は、『文阿弥花伝書 甲』と比較すると、多様な機会・場合に応じた花の立て方の心得や様々な花材ごとの心得、しんの形状に応じた立て方の工夫など、より具体的に細部に亘る心得を示した伝書であると言える。また、『文阿弥花伝書 甲』に見られるような、座敷飾りにおける花の立て方や貴人を迎える時の花の心得の記述も見られる（ただし心得の内容は異なっている）。しかし『文阿弥花伝書 甲』の内容と齟齬するものもある。その典型的な例が、賀取・嫁取の花に関する心得である。『文阿弥花伝書 甲』鹿王院本には次のとおり記されている。

一 むことりよめむかへの花など世にあつかふ事ハ一向此りうにハ不用。其心ハいかにとなれば、先花を翫事ハ無常別離の心をすすむるによる也。但其道にすける人の所望興行ならば、いかにも祝言をなし、あいあいこにこと可立也。如此心をつかへば、さらにすきにいりおもしろき事あるべからず。能々心えべきなり。（伊藤敏子氏による翻刻）
拠った。傍線筆者）

「此りう」、つまり『文阿弥花伝書 甲』の系統の教えにおいては、花を扱うことは無常別離の心を勧めるものであるから、この流においては賀取・嫁取の花などと世間で言っているものは行わないことを原則とするというのである。それに対し、『文阿弥花伝書 乙』には賀取・嫁取の花の心得が見える。例えば鹿王院本に次の心得がある。

一 むこ入よめとりの花をたつる時ハ、松可然候。あいおいの松もよく候。
（伊藤敏子氏による翻刻）
拠った）

また東大本では次の通りである。

一 よめ取賀取の花ハ松を心に立／ハ相生に可然候。（翻刻は筆者）

これらの伝書は、『文阿弥花伝書 甲』とは異なり、賀取・嫁取の花を立てる機会の一つとして、心得を積極的に示している。

こうした齟齬から、東大本を含む『文阿弥花伝書 乙』は、『文阿弥花伝書 甲』とは別系統の教えが、後世の人によつて、宗梅から初代文阿弥への伝授と仮託された可能性が高いと考えられる（したがって、今後本伝書の呼称を再考する可能性がある）。その内容は、東大本奥書にある、中村又五郎家宗による天文十一年（一五四二）八月八日の相伝までにはできていたと考えておく。また、『文阿弥花伝書 乙』東大本奥書年記が『文阿弥花伝書 甲』石田家本奥書と類似しているのは、『文阿弥花伝書 甲』の伝授の系譜に似せる意図があった可能性

が考えられる。

おわりに

『文阿弥花伝書』群は、これまで単伝書と合写伝書の区別もされず、また何種類かの伝書が含まれるにも拘わらずその間の区別も明確にされていなかったことが、学術研究を進める上での障害となっていた。本稿の第一の意義は、『文阿弥花伝書』群について改めて書誌学的な整理をし直し、今後の研究の土台を築いたことにある。

また『文阿弥花伝書 甲』及び『文阿弥花伝書 乙』を取り上げ、従来注目されていなかった伝本も含め、現存する諸本同士の関係を考察した。その結果、『文阿弥花伝書 甲』は宗梅から初代の文阿弥に対して伝授された時にすでに現存本の序文及び七十四箇条の心得の体裁を有していたと推測される。加えて、条数などの体裁の面においては石田家本が最も完本の形態に近いが、本文の委細については陽明文庫本・西教寺本・鹿王院本・猪熊家本の方が祖本に近いと考える。九博本は、伝授の過程でこれらの本よりも後世の改変の影響を大きく受けたと見る。

さらに、『文阿弥花伝書』群の伝来に関わる人物として、従来あまり検討されてこなかった宗梅にも注目した。その人物としては、連歌師の宗梅との関連の可能性が考えられる。

最後に、『文阿弥花伝書 乙』、『文阿弥花伝書 丙』、『文阿弥花伝書 丁』の存在により、文阿弥が伝授に関わった伝書の範疇に入れるべき伝書はどこまでか、という問題が提起されることを指摘した。そのうち、特に今回初めて詳しく調査した東大本の検討により、東大本を含む『文阿弥花伝書 乙』は、『文阿弥花伝書 甲』とは別系統の教えが、後世の人によって、宗梅から初代文阿弥への伝授であると仮託された可能性が高いと結論付けた。この伝書の成立下限についても、東大本により指摘した。

本稿において、従来基礎研究が十分になされてこなかった室町時代の花伝書のうち代表的な一群を取り上げ、新出資料も含めた書誌学的整理を行ったことは、今後、草創期のいけばなについての学術研究が進展するための一助となると考える。しかしながら、『文阿弥花伝書』群の成立・伝播の全容を明らかにす

るためには、本稿執筆時に当たることができなかった諸本の原本・翻刻も含めた検証が不可欠である。引き続き研究を深め、稿を改めて論じたい。

〔付記〕

本稿の作成に際し、重田みち教授には、『文阿弥花伝書 乙』東大本、『義政公御成式目』等の一部の資料検索、ほか考察・論述面での全体的な御指導を賜った。また、東京大学図書館、池坊短期大学図書館では、資料調査を許可いただき、御助力を賜った。深く感謝申し上げます。

- 「上村観光編『五山文学全集第四卷』、思文閣出版、初版一九七三年、再版一九九二年、五七〇―五七一頁。
- 「山根有三『たて花概論―いけばなの確立と展開』、山根有三編『いけばな美術全集第二巻 いけばなの成立』、集英社、一九八二年、一一六―一一七頁。
- 「鹿苑日録二十三、辻善之助編『鹿苑日録第二巻』、続群書類従完成会、一九三四年、二四〇―二四五頁。
- 「『美術研究』五二号、東京文化財研究所、一九三六年、三九―四三頁（東京文化財研究所刊行物リポジトリにて公開）。
- 「伊藤敏子『文阿弥花伝書』図版解説」、山根有三編『いけばな美術全集第二巻 いけばなの成立』、集英社、一九八二年、一六六頁。
- 「華乃栞社編『華道年鑑昭和十八年版』、華乃栞社、一九四三年、四五九頁及び新大阪新聞社編『大阪府年鑑昭和四〇年版』、新大阪新聞社、一九六五年、五七三頁。
- 「『続花道古書集成 第四巻』、思文閣出版、一九八〇年。
- 「山根有三編『いけばな美術全集第二巻 いけばなの成立』、集英社、一九八二年。
- 「伊藤敏子『文阿弥花伝書―阿弥派花伝書の成立と伝承』、山根有三編前掲書(8)、一三九頁。
- 「名和修『立花故実』解題」、岡田幸三編『図説いけばな大系第六巻 いけばなの伝書』、角川書店、一九七四年、九一頁。
- 「岡田幸三編『図説いけばな大系第六巻 いけばなの伝書』、角川書店、一九七四年。
- 「名和修前掲論文(10)、九一頁。
- 「宮内庁三の丸尚蔵館編『近衛家熙―風雅の探求 三の丸尚蔵館展覧会図録25』、宮内庁、二〇〇一年。
- 「林智子『賢珠花伝抄(文阿弥花伝書)』図版解説」、京都府京都文化博物館・東京都江戸東京博物館・読売新聞社編『特別展いけばな 歴史を彩る日本の美』、京都府京都文化博物館・東京都江戸東京博物館・読売新聞社、二〇〇九年、四〇頁。
- 「森谷尅久『賢珠花伝抄(文阿弥花伝書)』解題」、岡田幸三編前掲書(11)、八三頁。

- 「伊藤敏子前掲論文(9)、一三九頁。
- 「大和文華館編『大和文華 第四十八号 いけばな特輯』、大和文華館、一九六八年。
- 「岡田幸三編前掲書(11)。
- 「ただし西教寺蔵『花伝抄』第六巻「大巻物十二」の絵図の写真は陽明文庫蔵『立花故実』の翻刻に参考として添えてある。岡田幸三編前掲書(11)、九四―九八頁。
- 「京都府京都文化博物館・東京都江戸東京博物館・読売新聞社編『特別展いけばな 歴史を彩る日本の美』、京都府京都文化博物館・東京都江戸東京博物館・読売新聞社、二〇〇九年。
- 「森谷尅久前掲論文(15)。
- 「林智子『文阿弥花伝書』図版解説」、京都府京都文化博物館等編前掲書(20)、四二頁。なお、鹿王院蔵『たて花伝書』(仮称)の巻の数え方は、西堀一三等編『花道全集第二巻(花道史 上)』(河原書店、一九四八年)では第二巻と第三巻が逆になっているので注意が必要である。本稿では林智子氏の数え方に拠った。
- 「大和文華館編前掲書(17)。
- 「西堀一三等編『花道全集第二巻(花道史 上)』、河原書店、一九四八年。
- 「京都府京都文化博物館等編前掲書(20)。
- 「林智子前掲論文(22)。
- 「山根有三『文阿弥花伝書 鹿王院蔵』解説」、西堀一三等編前掲書(24)、三五一頁。
- 「伊藤敏子前掲論文(9)、一三九頁。
- 「重森三玲『文阿弥花伝書 猪熊信男氏蔵』解説」、西堀一三等編前掲書(24)、二四七―二四八頁。
- 「須原祥二『猪熊信男と恩頼堂文庫について』、四天王寺国際仏教大学人文社会学部『日本語日本文化論叢 埴生野』第二号、二〇〇三年。
- 「須原祥二他編『四天王寺国際仏教大学所蔵恩頼堂文庫分類目録』、四天王寺国際仏教大学図書館、二〇〇三年。
- 「西堀一三等編前掲書(24)。
- 「重森三玲前掲論文(29)、二四七―二四八頁。

- 34 九州国立博物館ホームページ「収蔵品ギャラリー」
(<https://collection.kyuhaku.jp/gallery/2230.html>)。二〇二四年五月二〇日閲覧。
- 35 <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/591959> (二〇二四年五月二〇日閲覧)。
- 36 『茶道古典全集 第二巻』、淡交新社、一九五八年。
- 37 以上『仙伝抄』については岡田幸三「仙伝抄」・「図版解説」、山根有三編前掲書(8)、一四二―一四五頁・一六六頁及び岡田幸三『仙伝抄』解題、岡田幸三編前掲書(11)、六四頁に拠った。
- 38 岡田幸三編前掲書(11)。
- 39 山根有三編前掲書(8)。
- 40 『花道古書集成 第一巻』、思文閣出版、一九八〇年。
- 41 岡田幸三「仙伝抄」、山根有三編前掲書(8)、一四二頁。
- 42 岡田幸三前掲論文(41)、一四三頁。
- 43 前掲書(40)。
- 44 <https://www.nichibun.ac.jp/meisyozone/rinsen/page3/02.html> (二〇二四年七月九日閲覧)。
- 45 矢野環『君台観左右帳記の総合研究』、勉強出版、一九九九年。
- 46 伊藤敏子前掲論文(9)、一四一頁。
- 47 岡田幸三前掲論文(41)、一四三頁。
- 48 矢野環前掲書(45)、一〇三頁。
- 49 筆者は二〇二四年五月二十四日及び六月十七日に調査を行った。
- 50 山根有三編前掲書(8)、四四―四五頁。

- 51 伊藤敏子前掲論文(9)、一三九頁。
- 52 伊藤敏子前掲論文(9)、一三九頁。
- 53 大和文華館編前掲書(17)、六三頁。
- 54 岡田幸三編前掲書(11)、九八―九九頁。
- 55 大和文華館編前掲書(17)、七五頁・七九頁・八〇頁。
- 56 石田家本は山根有三編前掲書(8)、四三頁。九博本は九州国立博物館ホームページ(前掲(34))。
- 57 山根有三前掲論文(2)、一二五頁・一二七頁。
- 58 矢野環前掲書(45)、一〇三頁。
- 59 木藤才蔵『連歌史論考 下』、明治書院、一九七三年、九四六頁・九五七頁。
- 60 『覆刻日本古典全集 頭伝明名録』、現代思潮新社、二〇〇八年、四三二頁。
- 61 林屋辰三郎校注『古代中世芸術論 芸の思想・道 of 思想2』、岩波書店、一九九五年、四八〇頁・五〇二頁。
- 62 山根有三前掲論文(27)、三三二頁。
- 63 大和文華館編前掲書(17)、七五頁。
- 64 大和文華館編前掲書(17)、七七頁。

Bibliographical Analysis of Various Books of “Mon-ami Kadensho” and Examination of the Relationships among the Books

YAMASHITA Akane

The biographies traditionally referred to as *Mon-ami Kadensho* 文阿弥花伝書 are biographies of ikebana in the late Muromachi period (1336-1573), when the first style of ikebana began to take shape. They are biographies that Mon-ami I was involved in writing and handing down, or that were forged under the name of Mon-ami. However, basic research on these biographies has not been sufficiently scholarly, for example, because several different biographies were treated as if they were a single biography. The primary significance of this report is that it has laid the foundation for future academic research by reorganizing the *Mon-ami Kadensho* group bibliographically.

There are four different types of biographies in the *Mon-ami Kadensho* group. This paper focuses on two of them, namely A and B, and examines the relationship between the existing A and B texts, including those in the collections of the University of Tokyo and the Kyushu National Museum, which have not received much attention in the past.

The only known copies of *Mon-ami Kadensho* A are those of the Ishida family, Yōmei Bunko 陽明文庫, Saikyōji 西教寺, Rokuōin 鹿王院, Inokuma family, and Kyushu National Museum. Other biographies with some of the same content as *Mon-ami Kadensho* A, such as *Kaden* 花伝 in the collection of Jishōji 慈照寺 and *Sendenshō* 仙伝抄, are also enumerated. Through examination of the composition and transmission of various copies, it concludes that *Mon-ami Kadensho* A might have already had the same preface and style as the 74 articles when it was transmitted from Sōbai 宗梅 to Mon-ami I. In addition, while the Ishida family's copy is considered to be the closest to the complete version in terms of style, the Yōmei Bunko's, Saikyōji's, Rokuōin's, and Inokuma family's copies may be closer to the original in terms of textual details. The Kyushu National Museum's copy is considered to have been the most heavily influenced by later modifications.

This study also highlights the importance of examining Sōbai's background to clarify the formation and transmission of *Mon-ami Kadensho* group. He was possibly related to the *renga* (連歌 linked verse) poet Sōbai.

Finally, the existence of the *Mon-ami Kadensho* B, C and D raises the question of which of these biographies should be included in the biographies that Mon-ami was involved in the transmission of. Based on an examination of the University of Tokyo's copy, which was examined in detail for the first time, it concludes that *Mon-ami Kadensho* B, including the University of Tokyo's copy, is likely to be from a different lineage than *Mon-ami Kadensho* A, and was later considered part of lineage from Sōbai to Mon-ami I. The lower limit of the time of establishment of *Mon-ami Kadensho* B was also pointed out by the University of Tokyo's copy.